目的補語

黒羽英二

日的補語

黒羽英二

河出書房新社

黒羽英二
昭和六年、東京生まれ。
早稲田大学英文科卒業。
著書に詩集『いのちの旅』
（ユリイカ）、『黒羽英二
戯曲集』（思潮社）がある。
「目的補語」で昭和四十
五年度文芸賞受賞。

目的補語

昭和四十六年七月二十五日　初版印刷
昭和四十六年七月三十日　初版発行
定価　六八〇円

著者　黒羽英二
発行者　中島隆之
発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
振替口座（東京）一〇八〇二
電話二九二一三七一一

印刷　中央精版
製本　小泉製本

©1971　EIJI KUROHA

0093-037132-0961

目次

目的補語　5
痺れ　153
あとがき　228

裝幀　利根山光人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目的補語

目的補語

私がやられたのは、竹刀だったろうか。それともモップの柄だったのだろうか。あるいは何か私の知らない棍棒のようなものだったのか。竹刀を持っていたことは確かだ。モップの柄を振りまわしているのも見た。しかし見ている間に、私はなぐられてしまったので、確認している余裕など全然なかったのだ。それは一瞬のうちに起った、と言っても嘘にはなるまい。私はしたたかにやられ、ぶちのめされ、血を吐いて、気を失ってしまった。気がついた時は救急車の中だった。最初に浮んだ考えは、私が、この世界から、またもや、不意に見捨てられ、理不尽にも、断られてしまった、放り出されてしまった、ということだった。これは頭をやられたために出てきた愚痴ではない。私は、何も好きこのんで救急車へなんか乗ったんじゃない。誰だってそうかもしれないが、自分の生涯の中で、自分が救急車へ乗る、いや厳密に言えば、乗せられる場面など、どうして想像できるだろうか。この交通地獄とか言われている世の中だ。いつの日か、自分もそんな目に会わないとは限らない、という予感が、ちらりとでも掠める、

ということはあるかもしれない。が、そのすぐあとから、まさか自分に限って、という具合に、強い打ち消しの言葉が出てくるものだ。まして、交通事故ではなく、それ以外の原因で、自分が救急車へ担ぎ込まれる場景など、誰だって予想できることじゃない。だが、それが事実として起ったのだ。しかもほかならぬわが身の上にである。まもなく三十七歳になろうという私自身の上にである。

その気配は、すでに昼休みにあったのだ。彼等が永楽軒に集結しているというのである。永楽軒というのは、そこいらによくある日本式の中華料理店で、もっぱらラーメンやギョーザが中心であり、昼間は、生徒相手にコカコーラやジュースを売るといった、極く安直な、いわば生徒の溜まり場といってもよいところであった。わがD高等学校の裏門とは、筋向いの位置にあり、大きな声を出せば届くような距離しかなくて、教職員も、時たまラーメンのお世話になることがあった。時たまというのは、三年ほど前に、学校のすぐ近くに、萬来軒という、味の点において、また客扱いの点でも、永楽軒より、ややすぐれた店ができたために、本校の教職員のほとんどが、新しい店に乗りかえてしまったからである。だから、今では夕方、近所の工場に勤める労働者たちが、安い酒を飲みにくる時刻までの三時間ほどというもの、永楽軒の、油やごみで黒光りしている椅子の全部が、D高等学校の生徒によって独占されるようになってしまったのだ。永楽軒でも心得たもので、何とか生徒たちの気を引こうと、最近では、やたら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に若い女のはだかの写真ばかり目立つ週刊誌を一山も積み上げておいて、いつでも勝手に読めるようにして置いたり、質よりも量を要求する彼等の胃袋を満足させるために、大盛りラーメンとか大盛りライスなどという、わけのわからない品目までふやしてサービスこれつとめているといった次第なのだ。生徒たちも、このサービスをしっかりと受けとめて、毎日、日課のように、永楽軒に立ち寄る者も出る始末で、彼等が、やたらに盛りばかり良いラーメンと引き換えに、小ぜにを払ってだべっているうちはよかったが、やがて、お極まりの喧嘩が出る、店のガラスを割る、たまには、まぎれ込んだほかの客といざこざを起す、といった按配で、生徒の永楽軒立ち入り禁止を叫ぶ声が、教員の中から起ったのは、むしろ遅過ぎるぐらいであった。

もともと、生徒が肌身離さず携帯していなければならないはずの、生徒手帳、二十三ページ、「生徒心得」の中の、第五条、第二項にも記されている通り、「生徒は、登、下校の途中において、飲食店、喫茶店等に立ち寄ってはいけない」のである。しかし、主として、運動部関係の顧問教員たちの間から、クラブ活動を夕方暗くなるまでやって、へとへとになり、腹を減らしている生徒たちに、そのまま、生徒心得に書いてあるからという理由だけを、杓子定規に適用して、蕎麦一杯食うことを認めないで家へ追い返すのは、かわいそうではないか、第一、それでは、あの食欲旺盛な十代後半の少年たちの健康を損ねることになる、だからといって、それでは、生徒心得の中の、第五条、第二項を削除してしまうのはどうか、生徒は、それなら、腹さえ減っていれば、いつ、いかなる時、どこの店へ飛び込んで食事をしてもいいのか、それで

は、もののけじめというものがつかないではないか、教育不在といっても過言ではない、と言う教師もあって、この問題は、容易にけりがつきそうに見えなかった。

ついに、教頭が、

「まあ、いろいろ御意見もありましょうが、大分暗くなってまいりましたことでもあり、何とか今日中に結論を出したいと思いますので、ここはひとつ、生徒心得の条文は変えずに、クラブの練習などで遅くなった生徒に限って、当該クラブの顧問が黙認するということではいかがでしょう」

と結ぼうとした。

「黙認というのはまずいんじゃないでしょうか。これを黙認して、あれを黙認しないという、そういうところから規則の軽視、進んで規則の無視が生まれ、ひいては、法の無視、社会制度の無視というものが生まれ、民主政治の破壊、今日の、あの全共闘のごときものを招来するようになるのではないかと深く憂慮する次第です」

という教員の発言から、再び、教頭の発言、飲食店出入り黙認案を、全教員が承認するまでには、尚一時間の議論をみたのである。そして、立ち食いはみっともないから、扉の閉る店の中での飲食なら、という条件つきで、教頭の言葉が確認されたのであった。

「まったくくだらないったらありゃしない。大の男が、夜なかまで口角泡を飛ばせて議論すべきことかね、これが」

と言った物理（動物名や身振の特徴でニックネームをおくったのは昔のこと、今ではただ単に教科名だけを無雑作に呼び捨てにしている現状にならって言うのだが）の意見には、生徒の飲食店立入り禁止に関する問題という、あまりにも浮世ばなれしたテーマを誰ひとり疑うことなく、それどころか、おが屑をはねとばして、ひたすら前進を続けるドリルにも似た教師たちの異様な熱意に対する苛立ちとして、同感すべきところもあったが、永楽軒が、今、別の意味で、この昼休みの職員室を支配していることを思えば、あの、くだらない会議こそ、実に重要な意味を持っていたのだ。教頭の黙認案などに、安々と賛意を表明すべきではなかった、と今更のように悔まれた。

「間宮と、ほかに誰がいるの？」

と場ちがいな胴間声を張り上げて、胡麻塩頭というのか、まるで急ごしらえの老人に扮した学生芝居の頭そのままといった感じの、大小さまざまな白髪の縞模様が、まだ残っている黒い部分としっくり混じり合っていないで、見苦しい斑になっている、その加藤浩一が、校庭側の自分の席を立って、ソファに近づいてきた。ソファは、この職員室に二つある扉の、丁度中間に、廊下側の壁と背中あわせに置いてあった。破局を直感した群棲動物の本能と、かと言ってこちらから先制攻撃をかけるわけにも行かない、教師という職業の苦しさ、弱さが、何となく寄り添う形で、教師たちにソファを囲ませていたのである。そのソファだけが、すべて貧弱な、

新しいくせに、早くもがたがきているほかの調度にくらべて、必要以上に豪華だった。それも道理で、つい、この三月まで校長室にあったものが、新たにこの春の卒業生から記念品としてソファが贈られたので、職員室に払い下げられてきたのである。

「間宮と、それから、弓削、綿貫、壬生、あ、そうそう、大神と日下もいましたね。全部で七人はいたから、あと、誰だったんだろう？」

と山名善三郎が言った。

「それで、何と言ってこられたんです？」

と訊いたのは、確か教務主任の浅倉である。

「何てって……、そうですね。まあ、よく考えたら、とは言ってきたんですけれどね」

「今更、よく考えたらなんて、もう永楽軒まできてるんでしょ」

と、重ね合わせた薄い紙を引き裂くような調子で、数学の中山忠平先生が言った。

私は、この時の山名の顔色をよく覚えている。どんなに、ずきずき頭が痛む時だって、絶対に忘れられる顔ではない。あれは、確かに嘘をついている時の顔だった。嘘をつき、ごまかして、ごまかしたことを恐れ、恐れている自分を知っていて、それがいやになり、かといって、彼等、間宮たちのところへも、今更、出かけて行って説得するわけには行かない、ということを、全部、一瞬のうちに表現している顔だった。思い過しではない。今までの、山名の、すべての言動を、順にたどって行けば、当然出てくるヨミだった。

「きびし過ぎたんですよ、間宮たちの処置が」
と言ったのは数学の加古川肇だったと思う。
それから甲論乙駁という形で、国語やら体育やら英語などが、言葉に言葉をぶつけ合った。
「いや、あれはあれで当然ですよ」
「過ぎ去った話はやめましょうや。それよりやつらをどうするか、いそいで決めなくちゃ」
「やっぱり仕返しにきましたね。恐ろしい子供たちだ」
「子供じゃない、毛脛を生やした、いいおあにいさんですよ」
とおどけてみせたのは、化学の北村留雄だが、誰も笑わなかった。
１１０番を呼ぼう、すぐ警察へ電話をかけよう、という声が出た。あれは堀田だったろうか、それとも木内だったろうか。思いがけないこの数字は、しかし警察という常日頃異物扱いしている存在の助けを、この期に及んで求めようとするうしろめたさの前に、見る見る拭い去られてしまった。たとえ力ずくであっても彼等を説き伏せようじゃないか、という私の提案が、１１０番案に先行したからでもあったと思うが、今となっては、この提案も妙なもので、何と言ったらいいか、恥ずかしいものだと言ってしまってもいいような気さえするくらいである。というのも、力ずくといったところで、具体的に、どういう場景を想定して言ってるんだと訊かれたら、極めてあいまいな答しか出せなかったにちがいないのだし、第一、永楽軒に集結している生徒たちの所持している武器すら誰ひとり確認している者はなくて、いわば犬の遠吠え、

ごまめの歯ぎしり（というのとも少しちがうが、まあ五十歩百歩と言えそうな）と取られても仕方のない軽率な発言ではあった。とはいえ、この提案がなかったとしてみたところで、（実際誰ひとり、うんでもすうでもないので、なかったのと同じなのだが）今となっては、１１０番へかけないことが、彼等に、あの壊滅を完全なものとして与えたとも言えるのではないか。とすれば、彼等の青春前期を、あのような血なまぐさい一ページで汚されることから防ぎ得たかもしれないという意味で、教師たちめいめいの、おのれの潔白を証明するためのアリバイ作成への欲求が、ついに学校という共同体のぶちこわしに手を貸したことになるにちがいないとも言えるのだ。ともあれ、なさけない話だが、事実として、あわてて抹殺されはしたものの、１１０という数字は、単なる電話番号の域をはるかに越えて、おんぼろいかだにしがみついていた餓死あるいは溺死予定者たちに、不意に近づいては、すぐまた遠のいて行ってしまった救助船のエンジンの響きにも似た効果を、ソファを取り巻いていた教師たちの心に呼び起したのである。そうだ。あの時、思い切って、単純に、何も考えずに、受話器を取り上げていたとしたらどうだろう。少くとも、あれほど大量の怪我人は出さなくてすんだはずだ。もちろん、この私だってやられなくてすんだろう。だが、この考えも、どこか妙にずれている。進み具合がおかしいといってもいいかもしれない。いつのまにやら逆の方向へ向って歩いていると言えば正確にその動きをとらえたことになろうか。出口の明るいところを求めて探し歩いているうちに、気がついてみたら暗い闇の奥に来てしまったようなもので、第一、怪我人が出てはいけな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com